加工適性に優れた長球たまねぎ「北見交65号」

北見農試 研究部 地域技術グループ
株式会社 日本農林社

1. 背景

近年の生活スタイルの変化に伴い、たまねぎ消費量の約6割を加工・業務用が占めるようになった。こうした需要における輸入割合は約4割にもなり、実需者の需要に対応した供給体制の構築・強化が喫緊の課題となっていた。こうした背景をうけ、農林水産省は、輸入野菜からのシェア奪還に向け、加工・業務用野菜への転換を推進するため、平成25年より加工・業務用野菜生産基盤強化事業を創設した。北海道でも、各産地において本事業を活用した取り組みが進められている。加工・業務用としてたまねぎに求められる特性は、用途により多様であるが、これらに着目した品種育成は遅れていた。そこで、①剥皮加工時の歩留まりの向上につながる長球形質であること、②ソテー等の加熱加工において加熱時間の短縮につながる高い乾物率とBrixであることを主な目標とし、(株)日本農林社と共同でF₁品種の育成に取り組んだ。

2. 育成経過

「北見交65号」は、北見農試が育成した長球形質を有する細胞質雄性不稔系統「KTM9843-02-01A」と(株)日本農林社が育成した大球で長球形質を有する花粉親系統「NONC・S・C」との交配により得られた単交配一代雑種である。平成22年に最初の交配を行い、平成24年より北見農試において生産力検定試験を、平成25年より地域適応性検定試験を実施してきた。平成28年に北海道優良品種に認定された。

3. 特性の概要（「スーパー北もみじ」との比較）

- 1) 草勢は同程度からやや優り、葉先枯れはやや少ない。また、生育盛期における草丈は同程度からやや優り、生葉数および葉鞘径は同程度である（データ略）。
- 2) 肥大期は同程度であるが、倒伏期は7～9日遅く（表1）、早晚性は「晩の晩」に相当する。
- 3) 年次や地域により抽台株の発生が認められ（表1）、耐抽台性はやや劣る。
- 4) 乾腐病抵抗性は同程度であり（表1）、その他病害の発生程度も概ね同程度である（データ略）。
- 5) 総収量、平均一球重および加工用収量はやや優るから優る（表1）。「カロエワン」と比べ、平均一球重は同程度であり、総収量および加工用収量は同程度からやや優る。
- 6) 球品質は、硬さ、皮色および皮ムケは同程度であり、揃いはやや劣る（データ略）。球形状は地球型以上に縦長な長球である（図1）。乾物率およびBrixは高い（表1）。「カロエワン」と比べ、球形指数はやや高く、長球球数率は高い。
- 7) 貯蔵性は同程度であり（表1）、「カロエワン」より高い。
- 8) 「北もみじ2000」と比べ、加工ラインによる剥皮加工歩留まりと加熱加工歩留まりは約3ポイント向上し、加熱加工時間は約11%短縮する（表2）。
- 9) 倒伏揃期から約2週間で根切りしても、収量性を大きく損なうことはなく、乾物率等に大きな影響を与えず、枯葉期の前進化に有効である（表3）。

4. 普及態度

晩生系統であるが、加工・業務実需者の需要に応える特性を多く併せ持っている。加工・業務向けの生産・供給体制の構築に寄与することをとおして、輸入たまねぎからのシェア奪還につながり、道産たまねぎの消費拡大に貢献することが期待される。

- 1) 普及対象地域と見込面積：北海道のたまねぎ栽培地帯 約70ha
- 2) 栽培上の注意事項：
 - (1) 耐抽台性はやや劣るため、抽台の発生が懸念される地域での栽培や早期定植は避ける。
 - (2) 収穫期の遅れが懸念される場合には、倒伏揃期から約2週間で根切りを行う。